

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 4月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。

今月の9日で、私の母は満96歳になる。母の誕



生日を忘れた年はないが、どういう訳か今年は特別な気がする。画像のサボテンは24年前に亡くした父が露店で買って来たものと言う。子供心に覚えているが、『あまり、大きくならないなあ〜』と言うと、母は『何言うてんの、あんたが欲しいと言って持って帰ったじゃない。その時に脇に子供が生まれていたから、その子供を育てて、こんなに大きくなったのよ』『えっ』。

そんなことスッカリ忘れていた。そう言えば、そんな気もうっすらするが、覚えていない。ほな、その大事なサボテンを何処に置き去りにしたのだろう。『過去は裁けない』とは言うが自分も罪なことをしている。

今まで、母を立派な人だとは思って来たけれど、それは母自身についてだった。ただ、この間もなく96歳を迎える母を見て、その存在が立派だと思うこの気持ちは、初めて感じる種類のものだった。幼い自分が見ても、父は周りの人と比べて異彩を放っていた。そんな父に隠れて母は目立たない存在だったが、今思い出しても八面六臂の活躍だった。

ある時、店番をしている父の傍にいますお客さんが、目当ての雑誌の場所を聞いた。父は『向こうの通路を奥に進んで、その右がわ』と不愛想に応えた。お客さんは、憮然としながら進んだ。進んだが、途中で立ち止まり探している。『違う、違う、もっと向こう』『もっと、もっと』『そうそう、その右側』と言っている。

目当ての雑誌を見つけてお客さんがレジに遣って来た。どうみても納得できないという顔をしているが、父は何食わぬ顔で、袋に入れ、お金を受け取り、黙って差し出していた。自分も子供の頃によく店番をしていたが、もっと『ありがとうございます』という気持ちを素直に表現していた。

自分は、近くの進学校に通っていたので、同級生や先輩もよく参考書や文庫本を買いに来てくれていた。先輩は『お前とこな お父さんがいると買いにくい』『お母さんや、お姉さんがいてくれると ホツとする』と言ったのには、思わず前述の場面を思い出して、『それやそうだろう』と思った。だけど、お客さんにも色々いて、そんな父が好きで集まって来ている人たちもいた。

母は一度『吉田さんは・・・?』と聞かれて、『留守だと言うと、そのまま帰ってしまうひとが何人かいる』と笑っていたことがある。自分の目にも、いつも不思議に映っていた。どう見ても、それなりの豊富な知識や知恵がないと出来ないような仕事をしていそうな人が、父とにこやかに談笑している。自分はそれこそ落語に出てくるような、長屋の八さんと熊さんが床几に座って談笑している姿を想像する方が好きなのだが、あの普段 ポンとか、チーとか言ってるイメージしかない父が、どうしてあんなひとたちに受けが良いのか分からなかった。

父の葬儀が終わり、父を乗せた車の後を自分の車が負う形になった。助手席に乗っていた母が『あっ、お父さんが行ってしまう』と言う。後を着いて走っていたが、途中の道路事情で後を着いて走れなくなった時

のことだ。『ほな、追いかけてようか』と私が言うと、『いや、いい』とやけにアツサリ言う。これが、私が思う母の真骨頂だ。母がひとつの物事に固執した姿を見たことがない。とても大切なことだと思う。自分には分からない、頭の中の整理が出来ている証だと思っている。

いったい、母は何を大事に生きているか。

96年間、それは少しも変わることが無い印象を持っている。先日、久しぶりに母の元に行った。私には『徳一郎』という名の兄がいる。私は『清一郎』という名だ。兄と弟なのに、二人とも『一郎』という不思議な兄弟だ。実は私の名は、最初『一鶴』と書いてくっかくと呼ぶ名のはずだった。母が『鶴野』というので、その鶴のひと文字をもらって、『鶏群の一鶴』という意味で父が付けようとしたという。ところが、六つ年上の姉が、『それは、可哀想や、絶対からかわれる』と父に反対の意見をしたらしい。その姉は『美野』という、鶴野の野の字を貰っている。それで、『そうか』となったらしいのだが、若い方は御存じないかも知れない、後に笑福亭仁鶴という愛らしい人が人気を博したとき、私には姉が救いの神に見えた。

母のいる離れに行き、仏壇に手を合わせていると、その兄が遣って来た。二人が母の前に立つ格好になったのだが、母は涙ぐんで『こんな立派に息子がいたんやなあ』とボソツと言った。仕方が無いので『お母ちゃんが育ててくれた』と返した。それ以降母は何も言わなかった。それで、兄が『最近、おばあちゃんの隣の部屋で寝てる』と言った。『なんで』という顔を見ると、『夜中に電話を掛けて来て、何かあったかと慌てて離れに来て』『どうした？』と聞くと、『何も無い、電話したかっただけや』と言うんだと笑ってた。自分が面白がると兄は更に続けて『仕事で外に出てるやろ、そうしたらおばあちゃんから電話が掛かって来て、出る訳にはいかないので、仕事を後回しにして帰って来て、『どうした？』と聞くと、「ただ、帰って来てほしかっただけ』と言うのと教えてくれた。

自分は、それをきいて『よかったなあ〜』と思う。

今まで母は、母自身の事をいつも後回しにして生きて来て、ようやく好き勝手を言うようになってくれた、と思えるのだ。これほど嬉しいことは無い。母が亡くなってから『いつも儂らを優先して自分の事を後回しに生きていた』と思うと辛いに決まっている。

それで、自分ももう高槻に戻らないと思いついて『ほな、また来るかから』と離れから、廊下を少し歩くと『せえちゃ〜ん』と後ろから声が掛かった。何か言い忘れたのかと思いついて、また戻って障子を開けて『なに？』と聞くと、一瞬こっちを見たが、『なにやったか忘れたから、もういい』とあっさり言う。なるほど、と思いついて、こちらも踵を返し帰途に着いた。

自分は、母が27歳の時に生んでくれたので、という事は自分もそうなるのに後27年しかないということだ。『違つたらう、お前は今までも好きなようにして来たはずだ』という声が聞こえて来そうだが、否定はしない。

さて、最近何かと話題になっているウクライナを巡る米露の戦いだ、手にする情報が少なく知つたような事を言うつもりはサラサラないが、でも考えてしまうのは、一体何が狙いで許されたの戦いなのかという事だ。最近、戦争をするにしても許可が要りそうな気がする。ここまで執拗に米国が露国を挑発して来たという事は、望まれた戦争という事になると思うが、では望んだ方は何が目的かと、すんなりとは結論が出てこない。果たして米国の覇権低下が目的なのだろうか。それでは動機として足りない。地図を改めて見てみると、問題の地域はモスクワから極僅かな距離にある。東京から北海道程度の距離しかない。今回はプーチン大統領の忍耐力が試されたように思うが、頭のいいプーチンがその程度の事が分からないはずはないので、そうすると、単に露国・中国・印度のセンターライン強化なのか。それとも、露国を以前のエリツイン時代のようにオリガルヒが支配する時代に戻るのか。ひょっとすると、ひょっとする。そうなれば、習近平も黙って人民銀行を、差し出すしか無いのかも知れない。慌てなくても、後数年で答えが分かる。待つておくのが利口かな。

有限会社アルファー吉田清一郎